<table>
<tr><td>タイトル</td><td colspan="2">つげの育成・販売</td></tr>
<tr><td>概要</td><td colspan="2">放棄された里地里山を整備し、つげを育成。換金木材とする。</td></tr>
<tr><td>管理方法・技術的視点</td><td colspan="2">　つげは温帯～亜熱帯地方の半日蔭の場所で生育。北風に当たらない水はけのよい土壌で育て、3回移植を行う。近年では、法人向けの印材(大きめの印材)が主流になっていることもあり、20～25年かけて商品になる。
　根腐れの発生を防ぐ為、肥培管理に注意を要する。特につげは水に濡れるとシミになるので、伐採は晴天が続いた時を選んで実施する。特につげは水にぬれるとシミができるため注意を要する。
　現在国内のつげの用途は約90パーセントが印材、残りの10パーセントは櫛や将棋の駒として使われる。</td></tr>
<tr><td>備考</td><td>　元来つげは山ではなく畑や庭の一部に庭木の用に植えられていた。本事例では換金性が高いことから事業化。その一方近年では外国産との価格競争や制度改正等による社会的条件の悪化から地域ブランドを保持することへの危機感が高まっている。</td><td rowspan="3">放棄された里地里山を整備し、移植・育成されたつげ林
 </td></tr>
<tr><td>場所・主体</td><td>鹿児島県鹿児島市・
下曽山　眞一</td></tr>
<tr><td>URL等</td><td>http://www.jafta.or.jp/13 sanson hp/jirei/mori-yama/jirei19-1.html</td></tr>
</table>